

# 旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の室内意匠及び家具調度品の研究

—その施工・製作の実態と日本近代建築界の発展に果たした役割—

主査 小泉 和子\*<sup>1</sup>

委員 前潟 由美子\*<sup>2</sup>, 菅崎 千秋\*<sup>3</sup>, 平賀 あまな\*<sup>4</sup>

本研究では旧東宮御所の室内意匠と家具調度品について宮内庁所蔵資料を中心に分析し、天井絵画と家具は海外の室内装飾家が、壁装飾は国内の美術家や織物業者が製作したことを明らかにした。施工は国内の業者や職人が日本の伝統的な技法も取り入れながら本格的な西洋古典様式の室内を完成させたことを明らかにした。また、東宮御所として使用されなかった本建築は戦前期に度々、迎賓館として使用され、その都度、室内の改修や家具調度品の修理、製作が行われたことを明らかにした。造営時に輸入品に頼っていた家具は改修時には国内製で対応できるまでになったことも分かり、技術の発展が見られた。また、本建築完成後の利用状況について考察した。

**キーワード** : 1) 東宮御所, 2) 迎賓館赤坂離宮, 3) 室内意匠, 4) 室内装飾品, 5) 家具調度品,  
6) 製作, 7) 施工, 8) 第二次世界大戦前, 9) 賓客接遇, 10) 日本近代建築

## A STUDY OF THE INTERIOR DECORATION AND FURNITURE IN THE FORMER CROWN PRINCE'S PALACE (AKASAKA PALACE)

—Construction and Production Processes and the Influence on the Development of Modern Japanese Architecture—

Kazuko Koizumi

Yumiko Maegata, Chiaki Sugasaki, and Amana Hiraga

Akasaka Palace was originally constructed as the Crown Prince's Palace in 1909. This study aims to clarify the actual processes of creating the interior decoration and furniture. There are 3 main findings. 1) Artistic textiles made for the building are considered based on the decorative plan and its function. 2) Interior design and furniture were mostly allocated to Japanese artisans while the ceiling paintings were made in France. 3) Décor and the usage of the building before World War II.

### 1. はじめに

#### 1.1 研究の背景と目的

旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）は<sup>注1)</sup>、後の大正天皇である皇太子明宮嘉仁親王のための東宮御所として、明治42年に完成した宮殿建築である。設計には宮内省東宮御所御造営局が設置され、内匠寮技師・片山東熊が技監として建築事業を統括した。平成21年には、「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）」として、近代建築として初めて国宝に指定された。建築史分野における既往研究としては小野木重勝による『明治洋風宮廷建築』（相模書房、1983）等の一連の研究<sup>注2)</sup>、鈴木博之監修『皇室建築』（建築画報社、2005）、小沢朝江『明治の皇室建築』（吉川弘文館、2008）がある。家具・調度品に注目した研究としては本研究委員の小泉和子『家具と室内意匠の文化史』（法政大学出版局、1979）<sup>注3)</sup>、菅崎千秋、前潟（児島）由美子による研究の他<sup>注4)</sup>、中野裕子「旧東宮御所の家具～明治村開村45周年記念特別展『赤坂離宮を彩った華麗なる宮廷家具』によせて」があるが十分とは言えない<sup>注5)</sup>。

本研究は、旧東宮御所の室内意匠<sup>注6)</sup>・家具調度品<sup>注7)</sup>の施工・製作の実態から日本近代建築界の発展に果たした役割を明らかにすることを目的とする。旧東宮御所は当

時の日本で建設された西洋建築として最高のものであり、その後の日本近代建築界の発展のために欠くことのできない学習の場であったと考えられる。しかし、既往研究においては一部のデザイン的な研究を除き、室内装飾品や家具の国内外を含めた製作や調達、施工については十分明らかにされてこなかった。

本研究では、宮内庁所蔵の会計資料を設計書類と合わせて分析することにより、室内装飾品や・家具の製作や調達、施工の実態を、輸入元や製作者の特定、各部屋の施工業者や施工方法に至るまで明らかにする。また、美術家の関与や装飾品製作の産業としての側面にも注目し、分析をおこなう。西洋風室内装飾・家具といった、それまで日本国内に技術的蓄積の無い分野について、外国からの技術導入の状況を明らかにする。さらには、大正・昭和初期に、旧東宮御所が英国皇太子等の賓客来日時の接遇施設として使用されたことに注目し、旧東宮御所利用の戦前期の利用実態を明らかにする。

#### 1.2 研究方法

室内装飾と家具調度品製作、調達、施工について、宮内庁所蔵資料を中心に分析し、その実態を明らかにした。用いた主な資料は次のものである。

\*1 小泉和子生活史研究所 代表 \*2 小泉和子生活史研究所 所員

\*3 家具道具室内史学会 事務局 \*4 内閣府迎賓館 上席政策調査員

①本研究で新たに分析する資料：宮内庁宮内公文書館所蔵『臨時費東宮御所建築費』（明治32年～41年）

旧東宮御所建築のための全支出に関する会計書類 182冊。室内装飾・家具の輸入購入の領収書類，発注のための工事仕様書や施工業者の入札書類，工事の領収書類等が含まれ，工事の様子がその詳細に至るまで明らかにできる。

②既往研究で分析された資料：宮内庁書陵部所蔵『東宮御所御造営誌』，『東宮御所御造営局重要雑録』，『東宮御所御造営事務提要』，『東宮御所御造営工事録』及び附属図面等の資料で，設計施工の詳細が明らかにできる。

③大正・昭和初期の利用に関する資料：「外賓接待録」他の宮内庁所蔵資料，外交史料館所蔵資料

④当時の新聞，雑誌等の関係記事

以上の資料を中心に，つぎの点について調査を行った。

①旧東宮御所の室内装飾（天井絵画・壁面美術染織・壁張裂地・カーテン及び飾枠・家具）の製作・調達

②室内造作工事の施工について

③旧東宮御所の大正・昭和戦前期の利用について

各調査報告については以下に述べるとおりである。

## 2. 旧東宮御所の室内装飾

本章で各室内装飾について述べる前に，旧東宮御所の室名と位置を確認しておきたい。旧東宮御所は，1階が東

宮・東宮妃の私的な空間，2階が広間など公的な空間になっている。いずれも東側は東宮のための，西側は東宮妃のための諸室が設けられている（図2-1）。

### 2.1 天井絵画の購入と施工について

旧東宮御所の室内装飾として重要な要素に天井絵画がある<sup>注8)</sup>。天井絵画については，これまで完成時に記された『東宮御所御造営誌』の記述が知られているが，購入や施工の実態は知られていなかった。『御造営誌』には仏国人画家によると明記された部屋があること，朝日の間（図2-2）は「仏国画家『ペルツ』」の監督による<sup>注9)</sup>ことがわかるが，その詳細については不明である<sup>注9)</sup>。また，東宮御所造営には黒田清輝他，当時の美術界の第一人者が参加していたことから，天井絵画への日本人画家の関与の有無についても注目されてきた。今回，『臨時費東宮御所建築費』の内容から，天井絵画のフランスでの購入，輸送，日本での天井への張り付けに至る内容が明らかになった<sup>注10)</sup>。

『臨時費東宮御所建築費』に含まれる天井絵画に関する会計書類は，フランス側の作成した請求書類と日本語による購入記録からなり，部屋名，枚数，購入金額，年月日，購入先が記されている<sup>注11)</sup>（図2-3）。『御造営誌』に記述のある天井絵画は書類未発見の1階東西化粧室を除き，全てフランスから購入されたことが明らかになった。従来，日本人が描いた可能性が指摘されていた，

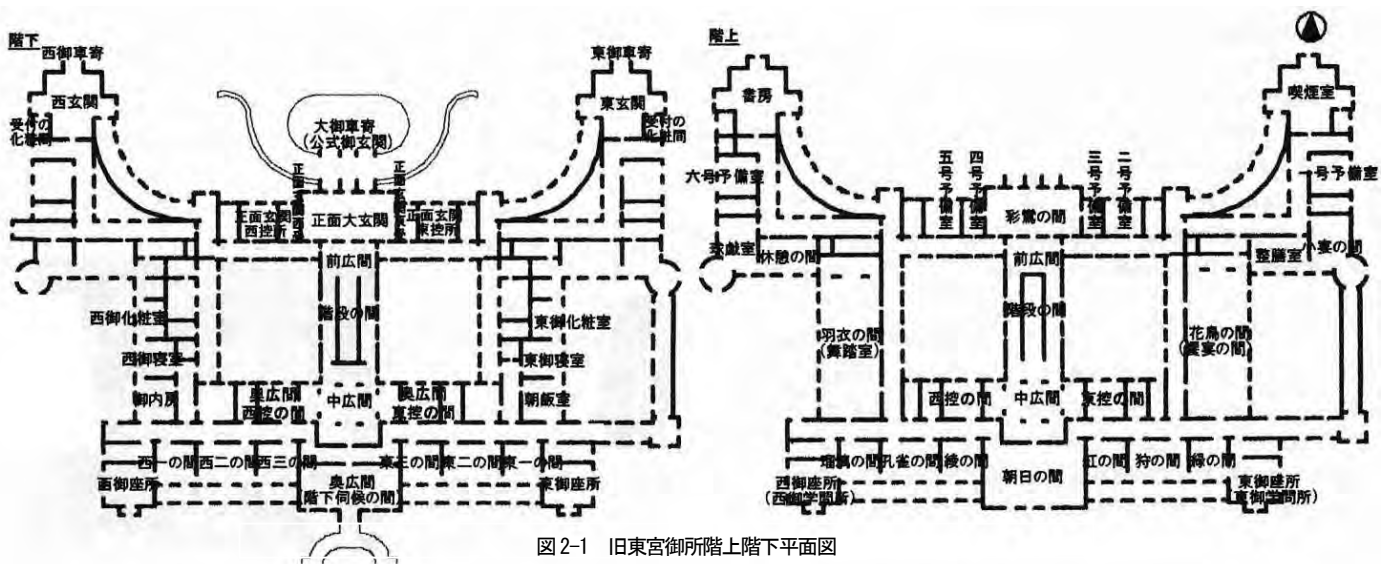


図2-1 旧東宮御所階上階下平面図



図2-2 朝日の間の天井絵画  
（『東宮御所写真帖』宮内庁宮内公文書館所蔵）



図2-3 朝日の間側面の天井画購入書類  
（レターヘッドにフルディノアの名が見られる。『臨時費東宮御所建築費』明治40年29，宮内庁宮内公文書館所蔵）

朝日の間の側面の甲冑や軍艦の絵画についても、フランスで製作されたことが確認された。請求書の中には発注日時が書かれているものもあり、最も面積の広い羽衣の間は、制作に約1年かかったことがわかる<sup>注12)</sup>。天井絵画購入の合計金額は20万3650フランであり、これは書類に示された当時の換算（1円につき2.56フラン）で約8万円となり、旧東宮御所の総工費510万円の約1.5パーセントにあたる。

絵画の購入先は、L.アラヴォアンヌ社であり、明治40年まではレターヘッドにH. Fourdinois（アンリ・フルディノア）と記載がある。旧東宮御所造営への貢献により、外国人として唯一、明治40年3月に勲五等旭日章を叙勲されたフルディノアは画家ではなく、当時のフランスを代表する室内装飾家である<sup>注13)</sup>。主要な部屋の室内装飾は、フルディノアから購入されている。『臨時費東宮御所建築費』に見られるこれらの購入内容が壁面の石膏飾りや壁の裂地の見本なども含めた部屋単位での購入記録であることから、フルディノアが家具のみではなく、室内装飾全般を範疇としていた様子が窺える。このことは、天井絵画も室内装飾の一環として認識されていたことを示すものと考えられる。

ただし、これらの書類にペルツという画家の氏名の記載は見られない。ペルツの名は、明治41年に旧東宮御所が公開された際の紹介記事<sup>注14)</sup>にも記され、その際に説明を行ったのがフランスでの買い付けを担当していた技師・山本直三郎であることから、実在した画家であると考えられる。フルディノアから注文を受けた絵画工房に關係すると推察できるが、さらなる調査が必要である。なお、フルディノアは明治40年5月に亡くなるが、その後もL.アラヴォアンヌ社を通じて1階の絵画が購入された。

ちなみに、2階の天井絵画の購入が終了した後、1階の天井絵画を日本で製作しようと試みた様子が会計書類から窺える。明治40年2月に、1階の天井絵画制作用のキャンバス、絵具等が購入され<sup>注15)</sup>、12月に浅井忠他2名に「油画調整方」嘱託費が支払われた<sup>注16)</sup>。これは、日本人によって天井絵画の制作をおこなったことを示すように見える。しかし、明治41年10月に1階の東西御化粧室を除く天井絵画がフランスで購入されたこと、大正11年に天井絵画を一部修理した岡田三郎助は「天井の絵は全部仏人の筆で概して装飾的なものである」<sup>注17)</sup>としていることから、最終的に1階に採用されたのはフランスから購入した絵画であったと考えられる。

購入した天井絵画の日本への輸送については、特に、明治40年9月付の記録<sup>注18)</sup>からは天井絵画が木製の芯棒に巻き付けた状態で二重の箱に入れられ、ロンドン出航の船便で横浜港に輸送されたことを確認することができ、『御造営誌』に記載された明治40年ロンドンからの輸入とされている油絵が、パリで購入された天井絵画を示すこと

が確認できた<sup>注19)</sup>。さらに、輸入した天井絵画の天井への張り付けに際しては、経師の雇い入れ記録が見られる。朝日の間については明治40年4月に経師雇い入れ記録があり、経師1日5名、手伝い1日3名が6日間の作業で天井に油絵を張り付けたことがわかった<sup>注20)</sup>。天井絵画は杉板の天井木摺下地に、和紙の捨て張りを行い、キャンバスを張り付けるという独特の手法が用いられている<sup>注21)</sup>。大規模な油絵の天井への張り付けに際して、日本の伝統的な経師技術を用いて対応したことが窺える。

## 2.2 壁装飾

### 1) 室内装飾に関わった美術家

旧東宮御所の室内装飾には、その時代を代表する美術家が多く関わっている。宮内庁書陵部蔵『東宮御所御造営誌』叙任辞令の記述に従って以下にまとめる。

・明治33年(1900)4月

黒田清輝にフランスへ室内装飾の取調べを嘱託

・明治38年(1905)5月

浅井忠に東宮御所東二の間の壁画を嘱託

・明治41年(1908)6月

今泉雄作模様図案の取調べ

今尾景年《孔雀花卉の図》作成

荒木寛畝装飾七宝焼下絵の作成(実際は渡辺省亭)

並河靖之装飾七宝焼の製作(実際は溝川惣介)<sup>注22)</sup>

浅井忠壁画と油絵の作成

黒田清輝、岡田三郎助装飾参考の製図

渡辺省亭食堂装飾七宝焼下絵の作成

渡辺審也、西三雄油絵の作成

旧東宮御所の造営は、当時の美術家、特に洋画家にとって注目の的だったようで、この頃制作された装飾画風タブローの隠れた制作動機にはこの建物の存在があったという仮説も出されている<sup>注23)</sup>。その際、彼らの頭のなかには西洋において国家の施設や宮殿を飾るのはアカデミー画家の高貴な仕事であるという事実があったのだろう。彼らにとって旧東宮御所の造営はアカデミックな画家として地位を築くための願ってもない機会だったのだ。

### 2) 旧東宮御所を飾った美術染織

美術染織とは、絵画作品を織、染、刺繍という染織技法で室内装飾用の壁掛や額、屏風等に表したものである。それらは、明治の急激な欧化政策にともない衰退しつつあった、京都西陣の染織産業の新たな活路を開くものであった。フランスなどの西洋に学び、西陣の伝統的な技法や機械に改良を加え、独自の織物を製作し、やがてそれらは明治宮殿の室内装飾用織物(壁張、緞帳、柱隠、美術染織など)に結実する。その後、国内外の展覧会、博覧会で高い評価を得ると同時に、皇室建築などの壁面を飾る装飾として重んじられるようになった。旧東宮御所でもそのような経緯をふまえ、国産の染織品が室内装飾に用いられたと考えられる<sup>注24)</sup>。実際に関わった業者として

は、京都の川島甚兵衛(川島織物)、飯田新七(高島屋)、西村總左衛門(千總)など、当時を代表する染織業者であり、いずれも明治宮殿の装飾用織物にも関わった経験を持っている。

装飾用織物のなかでも、一際目をひくのは、狩の間(東二の間・図2-4)に飾られた、浅井忠下絵《武士の山狩》綴織と、孔雀の間(西二の間・図2-5)に飾られた、今尾景年下絵《孔雀花卉の図》刺繍であろう。これらの美術染織は、それぞれの部屋の名の由来ともなっており、建物と緊密な関係を築いている。そのことは作品からもうかがい知ることができる。

### 3) 狩の間(東二の間)《武士の山狩》について

浅井忠下絵《武士の山狩》(図2-6)については、中沢岩太「東宮御所壁飾画について」(『木魚遺響』芸艸堂, 1909)や石井柏亭『浅井忠』(芸艸堂, 1929)から大まかな制作経緯を辿ることができる。主にこれらの資料を参照しながら、以下にその経緯をまとめた。

- ①明治37年(1904)3月から5月 黒田清輝が片山東熊を訪ね「謁見室壁掛織物」について話し合いを重ねる<sup>注25)</sup>。
- ②明治38年(1905)3月頃 川島織物の川島甚兵衛が浅井忠を訪ね、東宮御所壁飾綴織下絵を《武士の山狩》という画題で描くことを依頼。これに対し浅井は方一尺余の水彩略画を描き、川島に渡す。川島は、この水彩略画を御所係官に示し賛同を得る。
- ③川島は、浅井に綴織下絵を正式依頼するが断られる。浅井が川島のことをあまり信用していなかったためという。川島は、浅井の勤務する京都高等工芸学校校長中沢岩太を訪ね仲介を依頼。
- ④中沢は、川島個人の依頼か御所の下命か不明として、一旦とりなしを断ったものの、後日東宮御所御造営局事務官股野琢と顔を合わせた際、御造営局の下命であることを確認。浅井に制作をすすめ、浅井承諾。京都高等工芸学校ではこの制作に関してできる限りの便宜を図り、特別写生室を与える。
- ⑤川島が②で描いた方一尺余の水彩略画を紛失したため、浅井は新たにワットマン全紙大の図を描く。御造営局係官に示し、大要の許可を得る。
- ⑥浅井、制作のための細部を研究しはじめる。まず武徳

会または主殿寮に流鏑馬の巧者を紹介してもらい、木馬に騎乗させ写生する。しかし、この人物は病気になったため、京都高等工芸学校に務める林某という老人がその代わりをすることになる。

⑦浅井、馬の研究のため最初純粋な日本種の馬を探したが見つからず、主馬寮で研究および撮影をし、また武徳会より雑種馬を借り写生。さらに、この馬に林某を騎乗させ撮影。京都高等工芸学校所蔵の図書・模型など馬に関するものを参考として、馬の筋骨皮肉を研究する。

⑧浅井、背景の樹木を下加茂の森または仙洞御所の禁園で写生。京都高等工芸学校図案科第一回卒業生である間部時雄と霜鳥正三郎の二人にも写生させる。

⑨明治38年(1905)12月 半尺(6尺5寸に4尺5寸)の下絵完成<sup>注26)</sup>。疲弊した浅井に代わり霜鳥正三郎が東京へと持っていき、御造営局より批評をうける。もっと写実的になどという種々の要望が伝えられた。浅井は、その要望の一部を受け入れ、遠景を加えた下絵を制作。

⑩明治39年(1906)1月 御造営局側からの要望もおさまり、浅井は綴織下絵を制作するため、キャンバスを探す。しかし見つからず、やむを得ず上下3枚を継ぎ合わせて作る。

⑪同年2月 浅井、綴織下絵の制作をはじめる。

⑫同年5月のはじめ 綴織下絵完成<sup>注27)</sup>。

御造営局に完成の報せが行き、片山東熊と股野琢が京都へ出張し上出来だと頻りに褒めた。この下絵を綴織にするためには、かなりの日数を要するため、当面、狩の間には、浅井の手による油絵が飾られた。

⑬明治40年(1907)2月9日 内匠頭片山東熊より浅井に報酬として千円、慰労として白縮緬が下賜された。

以上の経緯から、おそらく片山東熊と黒田清輝によって大まかな方向性が決められた上で、川島甚兵衛や浅井忠に具体的な制作が依頼されていること、そして制作に際し御造営局から度々要望が出されていることがわかる。現在千葉県立美術館と京都工芸繊維大学に多く残されている《武士の山狩》下絵類は、前述した経緯にそれぞれ当てはめることができるが、そこからわかるのは年齢異なる三世代の武士が狩(鷹狩)をしているということがとりわけ強調されているということだ。旧東宮御所では武



図2-4 狩の間(東宮御所写真真拓) 宮内庁宮内公文書館所蔵



図2-5 孔雀の間(東宮御所写真真拓) 宮内庁宮内公文書館所蔵



図2-6 浅井忠下絵《武士の山狩》(『テキストル・アート100—近代日本の室内装飾織物』川島織物文化館 1994)

士の装飾が正面や公的空間に多く用いられていることがすでに明らかにされている<sup>注28)</sup>。この作品においても、建物全体の装飾計画に合わせた主題が選ばれていると言える。その上で、三世代の年齢の異なる武士は代々受け継がれていく天皇家とその繁栄を吉祥的に寓意していると考えられる。また、狩は日本においても西洋においても限られた特権階級にのみ許された行為であった。そのことから狩を表した美術品を飾ることは、空間の所有者を讃える常套手段であった。従って《武士の山狩》もこの建物を訪れる日本人および外国からの賓客にもわかる形で、建物の所有者を権威づけるものとして機能したことがわかる。

#### 4) 孔雀の間(西二の間)《孔雀花卉の図》について

今尾景年下絵《孔雀花卉の図》(図2-7)に関しては、高島屋の飯田新七によって刺繍にされたこと以外制作経緯はわからない。下絵を描いた今尾景年がどのような段階を経て最終的な作品に仕上げたのかも不明である。

描かれているのは2羽の孔雀。桜の木の上の雄の孔雀は、足元の雌の孔雀の方を見つめている。また、桜の木の根元にある岩にとまった雌の孔雀も雄の孔雀の方を見上げ、互いに見つめ合っているのがわかる。桜の木の下には紅白の牡丹と萱草が描かれている。

孔雀と牡丹の組み合わせは、前近代においても多く描かれてきた主題で、室町時代末より障壁画に多く見られる。また、孔雀は松とともに描かれることもあった。例えば、狩野探幽の二条城襖絵がある。今尾景年は円山四条派の流れをくむ画家であるが、この流派の祖・円山応挙をはじめ、他の円山四条派の画家においても、孔雀と共に描かれるのは牡丹か松が通例であった。さらに、孔雀がつかいで描かれる場合、それぞれの視線が交わることもなかった。

近代においても基本的に状況は変わらないが、孔雀とともに桜が描かれるようになる<sup>注29)</sup>。特にそれは海外へ持ち出される場合に顕著であった<sup>注30)</sup>。つまり孔雀や桜は外国人に対して「日本風」を演じる際にしばしば描かれてきた花鳥なのである。しかし孔雀と桜がともに描かれるようになって、《孔雀花卉の図》のように雌雄の孔雀が見つめ合った構図や、萱草が画面に描きこまれた作例は存在しない。



図2-7 今尾景年下絵《孔雀花卉の図》  
 (『テキスタイル・アート100—近代日本の室内装飾刺繍物  
 川島織物文化館 1994)

そもそも東宮御所の建設計画が浮上したのは東宮の結婚を控えてのことであった。そのことを考えると、この作品には「夫婦愛」や「夫唱婦随」のイメージが込められていると言える。誰もがわかるように、2羽の孔雀は見つめ合い、その孔雀は雄の孔雀が雌の孔雀を見下ろす位置に配されている。さらに、《孔雀花卉の図》左下に描かれた萱草に注目したい。「孔雀」を主題にした作品のいずれにも表れることはなかったこの花。中国では古来妊婦が男子誕生を祈り腰に下げる風習が知られており、のちに「宜子孫」という吉祥語と同義として用いられていた。そこから転じて、母を象徴する花であった<sup>注31)</sup>。従ってここには母としての東宮妃の役割も込められていることがわかる。この作品が飾られた部屋のメダイオン型石膏装飾でも同様に、つがいの鳥が恋愛し子を産むまでの様子を物語風に表している。

西洋において、女性の部屋に恋愛を描いた絵画を飾る例が多く見られる。しかしこの孔雀の間の場合、人間の恋愛模様を描くのではなく動物を描くことによって、その意味を託そうとしている。東宮の部屋に《武士の山狩》という人物像が飾られているのに対し、東宮妃の部屋に《孔雀花卉の図》という花鳥画が飾られており、部屋の利用者によって、日本の伝統絵画および西洋のアカデミー絵画どちらにも依拠する、明らかな格差をつけるためであろう。

以上の通り、旧東宮御所を飾った美術染織は、作品として自律したものではなく、建物の用途や部屋の利用者と密接に関係するものであった。建物および部屋全体の装飾計画に合わせ、組織や建築家、画家が何度も話し合いを重ねて主題や表現を定めていったことが推測できる。

#### 5) 壁張裂地の納入業者

中野裕子「旧東宮御所の家具～明治村開村45周年記念特別展『赤坂離宮を彩った華麗なる宮廷家具』によせて」

表2-1 室内装飾納入業者と室名 (中野裕子氏調査報告より作成)

	納入業者名	室名
壁張裂地	曾和商店	【1階】東西一之間, 西御内房, 西御寢室 【2階】第一客室, 東御学問所, 小宴之間
	飯田新七	【1階】伺候之間, 東御化粧室, 西二之間, 西御内房 【2階】東一～三之間, 喫煙室, 西三之間, 舞踏室, 喫茶室, 球技室, 御書房
	西村総左衛門	【1階】東御寢室, 西御座所
	川島甚兵衛	【1階】東二之間, 朝飯室, 西三之間
カーテン裂地	曾和商店	【1階】東御座所, 西御寢室, 西御化粧室 【2階】東御学問所, 第一客室, 第二客室, 小宴之間, 御書房
	飯田新七	【1階】伺候之間, 西一ノ間, 西御内房 【2階】東二～三之間, 西二之間, 球技室, 喫煙室
	西村総左衛門	【1階】朝飯室, 東御寢室, 西御座所
	川島甚兵衛	【1階】東西二～三之間 【2階】東一之間, 西御学問所, 舞踏室
家具輸入	エンジェル(仏)	【1階】第一客室, 第二客室
	モスレ(独)	【1階】伺候之間 【2階】小宴之間, 喫煙室
	フルディノア(仏)	【1階】東一～三之間, 朝飯室, 御寢室, 御化粧室, 東控所, 西御内房, 西御寢室, 西御化粧室, 西控所 【2階】東御学問所, 東一～三之間, 西御学問所, 西一～三之間, 東西控之間, 球技室, 御書房, 饗宴之間, 舞踏室, 一～六號予備室
家具製作	杉田幸五郎(日本)	【1階】東西玄関之間

は、『臨時費東宮御所建築費』に所収されている会計資料より、主要室の壁張裂地、カーテン裂地、家具の納入業者、納入金額を明らかにし、報告したものである。このうち納入業者と室名について表2-1にまとめた。

表2-1より、主要室の壁張裂地を納入したのは、いずれも国内で有力な京都の染織業者である点が注目される。曾和商店、飯田新七が主に2階の重要な部屋を担当しており、西村総左衛門、川島甚兵衛は主に1階の私室を担当している。

#### 6) カーテン・飾枠の納入業者

表2-1より、カーテン裂地もまた曾和商店、飯田新七、西村総左衛門、川島甚兵衛が納入している。会計資料によるとカーテン裂地の製作を行っている。なお、カーテン裂地を納入した曾和商店は輸入代行もしていることがわかった。たとえば、日覆地リンネルを横浜の「ヘルム商会」という代理店を通して英国に手配している<sup>注32)</sup>。

ところで、カーテンの裂地について『臨時費東宮御所建築費』をみると、これらの業者は、いずれも裂地を納入しただけで、その縫製や各窓への取付は杉田幸五郎と寺尾間に指名発注されていることがわかった<sup>注33)</sup>。また、カーテンの木製枠飾りの製作も、この二社に指名発注されており、カーテンの縫製から取付までを杉田幸五郎と寺尾間が行っている<sup>注34)</sup>。

#### 2.3 家具の納入業者

##### 1) 家具配置図と納入業者

『東宮御所御造営洋館図面』に「階上家具配置平面図参拾式枚」、及び、「階下家具配置平面図拾九枚」が所収されていることが今回の調査によって明らかになった<sup>注35)</sup>。建設工事中に作成されたもので、階上32枚、階下19枚がそれぞれ綴りになっている。1部屋ないし2部屋(続間の場合)ごとの平面図に各家具が配置され、室名、家具名、家具の番号等が記されている。いくつかの書式が異なる図面が混在しているが、表2-1に従って、各室の配置図を家具納入業者別に分類すると、表2-2のように分類でき、業者ごとに図面の書式が異なることがわかった。

まず、フルディノアが納入した28室の配置図は饗宴之間、四号五号予備室、二号三号予備室、六号予備室、一号予備室、舞踏室を除くすべての図面で室名、家具番号が活字、家具名が手書きである。一～六号予備室の図面では室名、家具番号、家具名とも手書き、舞踏室は手書きの家具名のみ、饗宴之間は一部の家具名のみが記載されている。また、図に記載された室名の頭にアルファベットの通し記号がついていることも共通した特徴である。これと階下東御座所、東控之間、喫茶室、室名不明のP-2、3、4 SPARE ROOMの書式は共通しており、表2-2では業者不明としているが、フルディノアが納入した部屋である可能性が高いと考えられる。

つぎに、モスレが納入した3室の配置図はいずれも青

色の線、手書きの青字で家具に網掛をしている。階下西御座所、西一～三之間もこの特徴と一致することからモスレが納入した部屋である可能性が高いと考えられる。

最後に、エンシエルが納入した2室の配置図については、共通した特徴はなかった。第一客室(朝日之間)の図は手書きの室名以外に文字の記載はない。一方、第二客室(彩鸞之間)の図は手書きの室名、家具名に加えて、家具を置く位置まで細かく寸法が記されている。

ところで、「階下家具配置平面図拾九枚」には主要室

表2-2 納入業者別家具配置図一覧

納入業者	階数	室名	家具配置図に記載された室名	
フルディノア <sup>注36)</sup>	階下	東一之間	B PRIVATE SALON MESSIEURS	
		東二之間	C PRIVATE SALON MESSIEURS	
		東三之間	D PRIVATE SALON MESSIEURS	
		東朝飯室	E MORNING ROOM MESSIEURS	
		東御寝室	F BEDROOM MESSIEURS	
		東御化粧室	G TOILETTE MESSIEURS	
		西御内坊	H BOUDOIR DAMES	
		西御寝室	I BEDROOM DAMES	
		西御化粧室	J TOILETTE DAMES	
	西御座所	R Waiting Room Dames		
	階上	東御字掛所	CABINET D TRAVAIL MESSIEURS	
		東一之間(緑之間)	SALON 1 MESSIEURS	
		東二之間(狩之間)	SALON 2 MESSIEURS	
		東三之間(紅之間)	SALON 3 MESSIEURS	
		西御字掛所	CABINET D TRAVAIL DAMES	
		西一之間(瑠璃之間)	SALON 1 DAMES	
		西二之間(孔雀之間)	SALON 2 DAMES	
		西三之間(綾之間)	SALON 3 DAMES	
		東控之間	K WAITTING ROOM MESSIEURS	
		西控之間	L WAITTING ROOM DAMES	
球技室		M BILLARD		
モスレ <sup>注37)</sup>	階下	伺候之間	Halle	
	階上	小宴之間	Dining Room	
		喫煙室	RAUCHZIMMER	
	エンシエル <sup>注38)</sup>	階上	第一客室(朝日之間)	Grand Salon
		第二客室(彩鸞之間)	SALON D ATTENTE EMPIRE (9 D' ecembre 1903)	
	不明	階下	東御座所 [フ]	A SITTING ROOM MESSIEURS
			東控所 [フ]	Q Weiting Room Messieurs
西御座所 [モ]			DRAWING ROOM / WEST SITTING ROOM	
西一之間 [モ]			Boudoir / West No. 1	
西二之間 [モ]			Large Salon / West No. 2	
西三之間 [モ]			ANYE ROOM/West No. 3	
階上		前広間	VESTIBULE REZ de CHAUSSEE	
		正面玄関	VESTIBULE D ENTREE REZ de CHAUSSEE	
		階段之間	GALERIE GRAND ESCALIER	
		小広間	2■■VESTIBULE 1 ETAGE	
		喫茶室(休憩室) [フ]	O SPARE ROOM	
		不明 [フ]	Salon No-3	
		不明 [フ]	P-2 SPARE ROOM	
		不明 [フ]	P-3 SPARE ROOM	
不明 [フ]	P-4 SPARE ROOM			
中央広間	Grand Vestibule			

[フ]は書式からフルディノアが納入した可能性がある室、[モ]は書式からモスレが納入した可能性がある室を示す。■■は判読不可能な文字を示す。

であるにもかかわらず東西玄関之間は含まれていない。東西玄関之間については児島（前潟）由美子「赤坂離宮の室内装飾品の製作・調達についての研究」で、『東宮御所家具設計図』の中にこの二室のみ家具配置図が所収されている上、寸法単位が尺寸であることや他の家具設計図に比べて図面の精度が劣る点から、国内で設計、製作された可能性が高いと指摘した。中野裕子氏の調査により<sup>注39)</sup>、杉田幸五郎がこの二室の家具を納入していることが判明し、国内で製作されたことがはっきりした。したがって、「階上家具配置平面図参拾式枚」、及び、「階下家具配置平面図拾九枚」には国外の業者が描いた図面のみが所収されていることになる。

今回の調査ではこれら国外の業者にどのように発注されたかという点については、資料や記録がなくわからなかった。業者によって図面の書式が異なる点から、内匠寮が家具配置図や家具設計図を描き、個々の家具を具体的に選定した上で注文したのではなく、納入業者である、フルディノア、モスレ<sup>注40)</sup>、エンシェルが個々の家具の選定と配置図の作成をしたと考えられる。

## 2) 家具の製作と修繕

国内で家具を製作した業者についてみていく。

杉田幸五郎に発注された家具に関して『臨時費東宮御所建築費』をみると、家具を製作した部屋は、東西玄関之間だけであったが、ほかに「家具の修繕・消毒」が発注されていることがわかった<sup>注41)</sup>。杉田の以外には寺尾側に同発注があり、ほぼこの二社に指名発注されている<sup>注42)</sup>。

修繕の内容については、請求書明細に「椅子剥ン椅子張職 貳拾参人」「々張上椅子張職 貳拾五人」「消毒■費 壹式」（■は判読不可能な文字を示す）「裂地補修費 壹式」「運搬費」とあり、椅子裂地の張替えと消毒が行われたことがわかる<sup>注43)</sup>。修繕と消毒の目的については、該当資料には記録されていないが、裂地の張替の他に消毒も行っていることから、荒天で船が座礁したりして商品が水に浸かったり、破損したりと様々なトラブルがあったためだと考えられる。『臨時費東宮御所建築費』の中にも、上のような理由で納品物が水に浸かり、再び取り寄せるため納期を延期させてほしい、といった内容の願書がたびたび見られる<sup>注44)</sup>。

そのほか、椅子裂地の張替えが行われた理由としては、壁、カーテンや絨毯など同室内ファブリックとの色合いなどをそろえるためであった可能性も考えられる。

## 3) 杉田商店と寺尾商店

杉田幸五郎と寺尾側はそれぞれ杉田商店と寺尾商店の主人で杉田商店発行「和洋家具と室内装飾」によれば<sup>注45)</sup>、「宮内省御用達 和洋室内装飾、家具製作販売 杉田商店」とあり、洋家具、照明器具、カーテン、絨毯、小物まで室内装飾全般を扱う業態をとっていた。明治宮殿御造営時には片山東熊らの欧米視察に同行し、宮殿の室内

装飾工事も請け負っている。以来、「(略)有栖川宮邸(霞ヶ関離宮)、伏見、閑院其他各宮邸明治陛下の内親王の御婚家の竹田宮、北白川宮其他御慶事家具、三井、岩崎、住友、前田、鍋島、戸田、秋元、毛利其他華族、銀行は日本銀行、第一、興銀、正金、台湾其他、書銀行、明治帝国其他生命保険会社の他台湾総督府備閑東庁満鉄朝鮮総督府樺太庁、内地の地方官庁等(略)」政官界から宮家、富豪を納入先としている<sup>注46)</sup>。このうち東宮御所造営後に手掛けたことが判明している洋風建築では、長楽館(M42・京都府)、山形県庁(現重要文化財旧山形県庁・M44・山形県)が残存している。

一方、寺尾側は杉田商店の一番番頭であった。明治33年に独立して寺尾商店を開き、杉田商店の取引先を引き継いでいる。東宮御所造営後に手掛けたことが判明している洋風建築は明治生命保険相互会社本社(現明治生命館・S9・東京都)<sup>注47)</sup>、朝香宮邸(現東京都庭園美術館・S9・東京都)が残存している<sup>注48)</sup>。寺尾側の他に杉田商店からは、小沢慎一郎(M34独立、小沢慎太郎商店を開店)、小林福三(M45独立、小林福三商店を開店)が独立しており、芝地区を高級家具室内装飾業者の集積地として発展させた。東宮御所造営時に杉田商店に在籍していた小林福三は独立後、大正9年に旭家具装飾株式会社を創立し、同社からはその後、三越製作所長 上田幹一、豊口デザイン研究所長 豊口克平、ヒノマルファニチャー社長 佐山吉之助等、建築業界の第一線に活躍する人材を多数輩出している<sup>注49)</sup>。東宮御所造営後に各業者が手掛けた洋風建築については、大きな問題であるにもかかわらず、既往研究や資料が不足しているため、今後も引き続き調査する必要がある。

## 3. 室内造作工事の施工について

旧東宮御所の室内は、天井絵画、裂地、石膏飾りなどで華麗に装飾が施されているが、木部の仕上げそのものも柱への彫刻や柱頭飾りなどを多用した豪華なものである。これら室内造作工事の施工は、建物全体を一つの組織が請け負ったのではなく、部屋ごとの入札を経て多くの大工棟梁が関わったこと、また、工事の区分には、大規模、かつこれまで経験のない装飾技術を用いるこの建物ならではの工夫が凝らされていることが明らかになった。

『工事録(工事着手竣工)』<sup>注50)</sup>から、工事区分、請負業者、金額、工期の詳細を知ることができる。それによると、室内造作工事の請負者には、木口熊吉、舟田平吉、佐野直次郎、長妻伝蔵、竹中熊次郎、杉田幸五郎といった名前が見られる。

室内の工事は、下地張りや寄木張といった床に関する工事、床上から天井蛇腹までの室内造作工事、下地張り、石膏装飾、天井絵画張り付けといった天井に関する工事の3つに分けられていたことがわかる。『臨時費東宮御所

建築費』を年代順に見ていくと、そのような区分に至るには、工事開始後の試行錯誤を経たものであったことが窺える。

装飾を多用する部屋の室内造作工事は、明治38年に2階の朝日の間から始められており、朝日の間では、腰羽目、扉、壁石膏工事など、細かく分割して工事が発注されていた<sup>注51)</sup>。しかし、明治38年8月に花鳥の間の室内造作工事を始めるにあたり、朝日の間の扉を製作し、技能が認められた木口を指名し、西側の一部分でイオニア式柱頭飾り、帆立貝型の彫刻などを含む壁全体の装飾を一括で製作させ、見本とする工事がおこなわれた<sup>注52)</sup>。その結果から、花鳥の間は「下部ハ周囲ノ下床ヲ起トシテ腰羽目中木ヨリ上部天井蛇腹マデ」を範囲とした部屋全体の室内造作工事が入札にかけられることとなった。この入札には、木口、舟田、長妻、杉田らが参加し、8,090円で木口が請け負った。この方法が効果的であると認識されたと考えられ、これ以降の各室については、室内造作工事として部屋ごと一括の入札がおこなわれている。

その内、西御学問所のような比較的小規模な部屋では、室内造作工事に天井下地と扉の造作も含めるなど、部屋の大きさや装飾の内容に応じて工夫が凝らされている<sup>注53)</sup>。それぞれ入札を経て、木口は、花鳥の間の他に球戯室、羽衣の間、2階西三の間などを、舟田は2階西御学問所、1階東御寢室などを、佐野は、1階御内房、伺候の間、東御座所などの室内造作工事を担当している。家具の欄で詳述した杉田がこれらの入札に参加し、小食堂、御書房、2階東二の間といった重要な部屋を請け負っていることも注目できる。室内造作工事は、ほぼ入札によっているが、朝日の間、花鳥の間、羽衣の間の床寄木張り工事については竹中熊次郎が指名されている<sup>注54)</sup>。このことは特に技能が必要な工事については入札によらず、適任者を指名していたと考えられる。大工棟梁のうち、木口が東京都文京区に現存する諸井邸の棟梁であったことが知られているほかは詳細な経歴は明らかになっていない。東宮御所の室内装飾を手掛け、技術を磨いた彼らのその後の活躍については今後も継続的な調査が必要である。

#### 4. 旧東宮御所の大正・昭和戦前期の利用について

明治42年の竣工後、第二次世界大戦以前の利用を明らかにすることは旧東宮御所の歴史と価値について正確に把握し、位置づける上で不可欠であると考えられる。戦前の利用については大正12年8月から昭和3年9月まで、摂政官時代から即位後の昭和天皇が居住したこと、賓客として大正11年に英国皇太子が昭和10年と15年に満州国皇帝溥儀が宿泊したことが知られている<sup>注55)</sup>が、その他の利用や、室内利用の実態、改修等については明らかにされてこなかった。

この章では竣工後の利用と当時の人々に期待された役

割について、宮内庁資料、外務省資料、当時の新聞雑誌等を分析し、その中でも旧東宮御所が初めて公式に使用され、広く国民の前に現れる英国皇太子接遇について注目し、室内の利用や室内装飾、改修工事の詳細について明らかにする。

##### 4-1. 旧東宮御所の利用と期待された役割

東宮御所の完成後も、皇太子（後の大正天皇）は青山御所内に置かれた東宮仮御所をそのまま使用し、即位後の大正2年6月に皇居に遷御した。さらに、皇太子（後の昭和天皇）が大正2年3月に高輪御所を東宮御所としたことから、東宮御所として建てられたこの宮殿は大正3年2月24日に「東宮御所」から「赤坂離宮」へと改称された<sup>注56)</sup>。

大正天皇による赤坂離宮の最初の利用は、大正4年の御大礼に伴う献上品の展示場所としてであったと考えられる<sup>注57)</sup>。献上品は「階上七室に分ちて陳列」<sup>注58)</sup>とあり、献上品を見るため大正天皇が行幸した。その後も皇族の私的な行事に使用され、花鳥の間を利用した皇族を対象とした映写会などに用いられた<sup>注59)</sup>。皇太子（後の昭和天皇）の利用としては、大正10年3月から9月に及ぶ欧州5ヶ国歴訪の前後に花鳥の間において晩餐会が開かれている<sup>注60)</sup>。

赤坂離宮に誰も居住しないことについて当時の新聞に国際ホテルや美術館への用途変更といった話題が取り上げられている<sup>注61)</sup>。また、当時、皇太子の成婚後の住居について検討が始められており、大正9年7月に東京帝国大学教授であった塚本靖は宮内庁の依頼を受け、赤坂離宮の活用を調査し、洋館に修理を加えたうえで、日本館を新築することで東宮御所への利用が可能であることを報告したと伝えられている<sup>注62)</sup>。

そのような事情もあってか、ついに赤坂離宮が公式に使用され、広く国民の前に現れることとなったのが、英国皇太子の接遇であった。英国皇太子プリンス・オブ・ウェールズ（後の英国王エドワード8世）は、大正11年4月12日から5月9日まで日本に滞在した。4月18日まで国賓として東京で各種行事に参加し、その間、赤坂離宮が迎賓館として使用された。その間の利用、さらに利用のための準備工事については、宮内庁宮内公文書館所蔵資料、外務省外交史料館所蔵資料、当時の新聞雑誌から詳細を知ることができる<sup>注63)</sup>。

宮内省内匠寮による準備工事の総額は、14万4649円40銭で、主な工事内容は天井絵画修復、裂地や絨毯の張替え、家具の補修と新規製作、電気設備工事、塗装や寄木補修、庭苑整備などであった。

赤坂離宮では、英国皇太子と随員の宿泊のみでなく、国務大臣、貴衆両院代表者、報道関係者の引見、英国皇太子主催の晩餐会といった公的な行事が行われた。さらに、数千人が前庭に整列し、国家奉唱、万歳三唱がおこなわ



れた歓迎行事では英国皇太子は車寄せをバルコニーに見立て<sup>注64)</sup>、登場して手を振り応えた。滞在中、4度もおこなわれた歓迎行事により、人で埋め尽くされた前庭の写真が広く報道された<sup>注65)</sup>ことは、外国からの賓客を迎える迎賓館としての赤坂離宮を一般の国民にも強く印象付け



図4-1 英国皇太子接遇時の様子「(24) 赤坂離宮前東京市内女学校生徒の奉迎」、『大英国皇太子殿下御来朝記念写真帖』、郁文舎出版部、1922年



図4-2 「6 赤坂離宮御着」、『答礼使御来朝記念写真帖中巻』、大阪毎日新聞社、1922年

ることとなったと考えられる。(図4-1、4-2)

#### 4.2 英国皇太子接遇時の室内利用について

赤坂離宮を迎賓館として認識させることに大きな影響を与えた英国皇太子接遇については、資料から室内の利用の様子、改修工事の詳細を知ることができる<sup>注66)</sup>。

赤坂離宮が東宮御所として設計された際の計画は1階を皇太子と皇太子妃の居住用とし、2階に大食堂、舞踏室といった接客用の諸室を備え、地階に厨房や暖房機械室等の各種設備を配置するというものであった。英国皇太子接遇においては基本的には、当初の設計意図を踏襲しつつも、必ずしも設計時の意図に従わず、全館を接遇に使用するために、用途を変更して用いた部屋があったことが明らかになった。英国皇太子の接遇に際しては、主に建物の東側を中心に利用されており、謁見などの公的用途には2階が、宿泊用途には1階が利用された。

2階の各室の利用は公的用途を中心とし、基本的に設計時の意図を踏襲している。摂政官による赤坂離宮訪問の際には東一の間(緑の間)が、國務大臣等92名の引見には東二の間(狩の間)が利用され、東三の間(紅の間)が控室とされた。新聞記者引見には朝日の間が使用された。晩餐会には皇族、閣僚をはじめとする約150名が招待された。皇族御休所に東三の間(紅の間)、一般諸員の休所に朝日の間をあて、晩餐会場としては大食堂(花鳥の間)と小食堂の両方を使用した。

また、英国皇太子の到着時には朝日の間において小休憩の後、大食堂にて随員らと昼食をとり、喫煙室に移動して随員らと寛いだとされていること<sup>注67)</sup>から、2階の東側の部屋全体を使用していたことが窺える。

1階の用途は宿泊のため、設計時の意図とは異なる用途に使用されることもあった。英国皇太子の宿泊には、設計時に皇太子の居住スペースとして設計された1階東側の御座所、寝室、朝飯室、化粧の間、浴室等がそのままの用途で利用され、御座所に並ぶ東一の間が次室として利用された。これらの部屋は寝室といった用途は設計時と同じであるが、皇太子の私的住居として設計された部分であり、来客の使用は想定されていなかったことから、接遇に際しての大きな用途変更と考えられる。

英国皇太子の他、随員、日本側接伴員の計9名が赤坂離宮に宿泊した<sup>注68)</sup>。1階南側に位置する東二の間、三の間、西一の間から三の間は設計時には皇太子、皇太子妃の私的な客室として設計された部屋である。これらの部屋にベッドや家具を新規に備えることにより、寝室として利用された。また、廊下を挟んだ予備室は随員用の浴室に改修された。さらに、1階北側の予備室を改修することにより、従者や日本側接伴員の寝室、事務室を準備している。厨房などの設備は当初から地下に配されていたものに一部改修を加え、そのまま使用された。

宮内省内匠寮による準備工事のうち、特に室内装飾と関連のある天井絵画修復と家具の修復・新規作成について詳細を見ると、造営当初は輸入に頼っていたこれらの分野で日本人の技術の発達が見られる。

天井絵画修復は、東京美術学校教授・岡田三郎助に委嘱された。修復は岡田と2人の助手が担当し、「御居室の天井の絵は全部仏人の筆で概して装飾的なものであるが、どうしたものか所々にシミがでている」<sup>注69)</sup>としている。昭和の大改修の際の調査によると、2階の朝日の間、花鳥の間、羽衣の間、東御学問所、東一の間に修復の痕跡が残されていることが指摘されている<sup>注70)</sup>。

家具については、裂地張替などの在来家具の補修がおこなわれたほか、新規用途に合わせた家具が製作されている。大規模なものとして、朝日の間の茶卓子14脚、彩鸞の間の茶卓子6脚、食堂椅子(図4-3)150脚が、1万287円で、日本人家具職人の寺尾僮により製作された。食堂椅子は藍色牛革張りの背に金色の菊花紋章が入り、木部は彫刻金箔仕上げで、晩餐会開催のために準備されたものと考えられる<sup>注71)</sup>。随員寝室・浴室については寝台と浴槽はアメリカ製品が輸入されたが、服掛け、服戸棚、安楽椅子等は日本人の職人により製作されている。これら多くの家具の製作・補修はビリヤード台補修が杉田幸五郎によるほかは、入札により寺尾が請負っている。

調度品などの室内装飾については英国皇太子の居間として利用された1階東御座所の様子が新聞で報じられて

いる<sup>72)</sup>。室内には、「鼈甲細工一尺」、「純金を鏤めた刀の鏢」、「日光神橋の小型の衝立」、「土佐絵の屏風」、「帝室博物館秘蔵の印籠が五十個」、「楓の盆栽と木瓜の花鉢」、「金魚を浮かべた菖蒲の水盤」が配されており、日本を意識した装飾がおこなわれていたことが窺える。他の部屋の室内装飾の詳細は不明であるが、次の間として使用された東一の間には、福田平八郎作の鯉を題材とした日本画が飾られた記録があること<sup>73)</sup>からも、日本を意識した装飾を用いた部分があったと考えられる。

英国皇太子接遇時の赤坂離宮の利用の特徴として、賓客の接遇という新たな用途に合わせた部屋の利用を行っていること、室内装飾の修復や新規製作には日本人が携わり、日本を意識した調度品による装飾がおこなわれていることがあげられる。これらは、東宮仮御所時代、満州国皇帝溥儀の接遇時の室内利用の基準のひとつとなつたと考えられる。

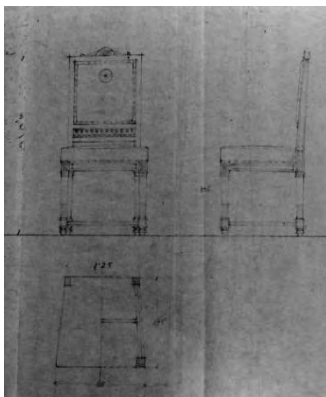


図 4-3 食堂椅子新規製作図面（宮内庁宮内公文書館所蔵『臨時部宮繕費赤坂離宮修飾費』3 記載の「赤坂離宮洋館客室用丸卓子其他製作注文書」図面）

#### 4.3 英国皇太子接遇後の利用について

英国皇太子接遇後は、再び皇族の会合などに利用され、新たな東宮御所には霞が関離宮があてられることが決まった。迎賓館としての役割が認識されたかに見えた赤坂離宮であったが、大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災を機に、赤坂離宮は「東宮仮御所」として利用されることになる。

東宮御所としての利用に向けて霞が関離宮が改修中であつたため、摂政官が初めて宿舎として赤坂離宮に入った 3 日後に関東大震災はおこつた<sup>74)</sup>。霞が関離宮は大きな被害を受け、そのまま赤坂離宮を東宮仮御所として使用することが決定したが、あくまでも震災後の緊急的な利用として大規模な改修はおこなわれていない。大正 13 年 1 月 26 日の成婚に向けては、皇太子妃が使用するための西側諸室の改修と女官のための付属施設が建設された<sup>75)</sup>。東宮仮御所として使用されている間も敷地内に新たに東宮御所を建設し、迎賓施設として洋館を使用することが提案される<sup>76)</sup>など、住居としての使用には不便な点が多かつたことが窺える。室内の具体的な利用や室内装飾の様子については今後のさらなる調査が必要である。

昭和 3 年 9 月 14 日に昭和天皇として皇居へ遷居がおこ

なわれた後は御大札献上品の展示、秩父宮、高松宮の結婚披露宴がおこなわれた<sup>77)</sup>程度で、目立った利用はなされていない。

赤坂離宮が迎賓館としての役割を再び果たすのは昭和 10 年 4 月 6 日から 15 日と、昭和 15 年 6 月 26 日から 7 月 2 日にかけて、満州国皇帝溥儀の東京滞在のときである<sup>78)</sup>。この際の室内利用等は基本的に英国皇太子のときと同様で、車寄せ上でのお手振りもおこなわれた。異なる点としては羽衣の間も利用し、帝室博物館所蔵の書籍典籍等を展示したことがあげられる<sup>79)</sup>。

その後、第二次世界大戦終戦にかけては、特に目立った利用は見られない。戦前の利用において、東宮仮御所としての利用はあつたものの、英国皇太子接遇での強烈な印象もあり、外国からの賓客をもてなす迎賓館としての役割が重視されていたと考えられる。このことは、戦後、迎賓館として利用されることへも影響を与えたと考えられる。

#### 5. まとめ

以上をまとめると次のようになる。

まず室内装飾全体については、黒田清輝を委嘱し、フランスの調査をさせたのをはじめとして、浅井忠・今泉雄作・今尾景年・荒木寛敏・並河靖之・渡辺省亭・西三雄など当時の日本を代表する美術家・工芸家を総動員して、御造営当局と建築家とで話し合いを重ねながらデザインを決定していった。

天井の装飾については、天井画はパリの室内装飾業社 L.アラヴォアンヌ社（アンリ・フルディノア）で製作され、舶載されている。一部は日本の美術家に描かせようと試みたが、結局はフランスから輸入している。ただし天井への張り付けは日本の伝統的な経師技術で行なわれた。

壁面の装飾については、壁掛・壁張裂地・カーテンは美術染織とよぶ高級織物が用いられた。とくに階上各主要室の壁面のデザインは片山東熊が中心となり、建物の用途に合わせ主題を決めたと考えられ、京都の織物業者川島甚兵衛（川島織物）と飯田新七（高島屋）が製作した。このうち壁掛は《武士の山狩》（東宮室）《孔雀花卉の図》（東宮妃室）と、それぞれ武士の文化、母性の象徴といった各室に合った日本絵画の伝統的な画題が選ばれ、浅井忠・今尾景年から画家が下絵を担当した。

壁張裂地は京都の飯田新七・西村総左衛門・川島甚兵衛が製作している。しかし一部は東京の曾和商店を通して輸入した。

カーテンは裂地（曇帳）の製作は京都の染織業者が行い、レース（日覆い）は曾和商店が輸入し、カーテンに仕立てる縫製、飾枠の製作および取付けは東京の杉田幸五郎（杉田商店）・寺尾憺（寺尾商店）が行った。

家具調度品についてはフランスとドイツの室内装飾業者に家具の選定、配置も任せ、輸入している。ただし東西玄関間の家具は杉田商店が行った。輸入家具は修繕

の必要が多かったようで、修繕と消毒は杉田商店と寺尾商店が指名されている。

室内装飾の施工については施工方法に試行錯誤がくりかえされている。たとえば、最初は腰羽目・扉・壁石膏工事などは細かく分割して発注されたが、装飾が多用される明治38年以降は天井・壁・床の3つに工事を分割して各業者に発注する、小規模の部屋は一室を一業者に発注する、特別な技能が必要な部分については入札によらず適任者を指名するという方法になる。

こうしてみると、天井画の製作や家具は輸入しているが、天井画の張付けは日本の職人が行っていること、とくに壁装については高度な伝統技術が西洋式宮殿の室内装飾に充分対応できたことがわかる。また壁掛をはじめとして、室内装飾全般において、その時代を代表する美術家と日本の伝統工芸技術が協力して製作したことは大きな特徴である。なお、この時の室内装飾関係業者はその後も斯界で指導的役割を果たし続けた。

建築後の利用については主に外国からの賓客を迎える迎賓館として利用され、住まいとしては震災後の大正12年から昭和3年まで東宮御所(昭和天皇)として使用されただけである。宮殿であるだけに、このことは近代洋風建築受容史上、あらためて検討する必要がある問題ではないだろうか。

#### <注>

- 1) 本稿において取り上げるのは迎賓館赤坂離宮となる前の東宮御所として機能する計画であった頃の建物の室内装飾のため、本文中で本建築を指す場合は「旧東宮御所」に統一する。
- 2) 小野木重勝「明治洋風宮廷建築に関する研究」1973、同「東宮御所造営における片山東熊の米国出張について」1977、同『明治洋風宮廷建築』相模書房1983、同『赤坂離宮の内・外装材と加工・施工技法に関する研究』科学研究費報告書1991、同「赤坂離宮の外装仕様」1992
- 3) 室内意匠、家具の視点からはじめて旧東宮御所について言及した論文
- 4) 菅崎千秋「赤坂離宮室内装飾研究」学習院大学卒業論文2003、児島由美子「赤坂離宮の家具に関する研究」京都女子大学卒業論文2003、児島由美子「赤坂離宮の室内装飾・家具に関する復元的研究」京都女子大学大学院修士論文2006、児島由美子「赤坂離宮の室内装飾の調達・製作実態」日本建築学会計画系論文集(603)、183-189、社団法人日本建築学会2006.5
- 5) 中野裕子「旧東宮御所の家具～明治村開村45周年記念特別展『赤坂離宮を彩った華麗なる宮廷家具』によせて」『明治村だより』58、公益財団法人博物館明治村2009
- 近年、公開が許された旧東宮御所建設に関する会計資料を使用し、建設当初の室内装飾、仕上材料、家具、製作者、購入先等を明らかにした。
- 6) 本稿では「室内意匠」は室内のデザイン全体を示すものとし、天井、壁面、カーテンなど個々のもの指す場合は「室内装飾」を使う。
- 7) 以下、「家具」とする。
- 8) 天井絵画の輸入の実態については平賀あまな「旧東宮御所(迎賓館赤坂離宮)の天井絵画について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』(建築歴史・意匠)、pp.941-942、2013)に一部を発表した。
- 9) 「ペルツ」については「ペルワ」、「ペルク」と記載されていることがある。日本工学会編『明治工業史建築編』(昭和2年)に、「ペルワ」と記されているが、『造営誌』の手書きの癖、当時の新聞等の記載からも、「ペルツ」が本来の記載であることを、小玉正任『国宝迎賓館赤坂離宮 沿革と解説』、茜出版、2012年が明らかにしている。
- 10) 天井絵画のフランスからの購入については一部を「旧東宮御所(迎賓館赤坂離宮)の天井絵画について」、『日本建築学会

- 大会学術講演梗概集』、pp.941-942、2013年で発表している。
- 11) 『臨時費東宮御所建築費』明治39年31、35、明治40年29、明治41年8(20212-31,35,20213-29,20214-8)に天井絵画の購入書類が含まれている。「但洋館室内用家具及食堂天井絵ノ代フルヂノワヘ支払ノ分」等の記述がある。
  - 12) 羽衣の間の購入書類から、注文が1905年2月3日、購入が1906年8月25日であることがわかる。
  - 13) アンリ・フルディノア(Henri Fooridinois)は、フランスのバリに拠点を置く室内装飾家。L.アラヴォアンヌ社の代表である。王室家具御用商人だった父親のAlexandre-Georgesの後を継ぎ、ヨーロッパ各地の王室へ家具を納入した実績がある。Ed. Gordon Campbell(2006). *The Grave Encyclopedia of Decorative Arts*
  - 14) 「新東宮御所」、『萬朝報』、明治41年2月8日、3面
  - 15) 『臨時費東宮御所建築費』明治40年2月(宮内公文書館20213-2)
  - 16) 『臨時費東宮御所建築費』明治40年12月(宮内公文書館20213-28)によると、「東宮御所御造営洋館用油画調製方囑託」として、浅井忠に500円、渡部審也に336円、西三雄に98円が支払われた。また、石井柏亭『浅井忠』(芸叢堂、1929、p.136)には、「尚同御所内の他の室の天井画、楯円のなかに雲浮び鳥の飛ぶ青空を描き其周囲に花果を配したのは、浅井の案によつて渡部審也が画いた」と書かれているが、部屋名などの詳細は不明である。
  - 17) 「新装を急ぐ赤坂離宮」、『東京朝日新聞』、大正11年2月6日、3面
  - 18) 『臨時費東宮御所建築費』明治41年8(20214-8)。明治40年9月2日付の片山東熊宛のエミールシュールス社からの請求書。
  - 19) 『御造営誌』の「輸出入品無検査通関」の記事に明治38年にアントワープ、明治40年にアントワープとロンドン、明治41年にアントワープから油絵を輸入とある。
  - 20) 『臨時費東宮御所建築費』明治40年6(20213-6)
  - 21) 寺田春之「第4節 天井絵画」、『迎賓館赤坂離宮改修記録』、迎賓館編、1977年。西洋では一般的にキャンパスの下地に漆喰を用いている。
  - 22) この件に関して、小玉正任「迎賓館赤坂離宮花鳥の間と小宴の間の七宝作者は誰かー会計文書からの推定ー」(『迎賓館紀要』1号、1976.12)、『建築史学』9号、建築史学会、1987.9)によると、荒木寛敏と並河靖之が製作した装飾用七宝は工事途中に行われた変更により不採用になり、渡辺省亭と瀧川惣介が製作したという。採用された作品に関しては、細野正信「渡辺省亭筆 迎賓館食堂七宝額下絵について」(『MUSEUM』351号、東京国立博物館、1980.6)と細野正信「迎賓館食堂七宝額下絵を中心に」(『宮内省内匠寮旧蔵 明治花鳥画下絵集成』京都書院、1981)に詳しい。
  - 23) 中田裕子「藤島武二《天平の面影》『諧音』そして《蝶》に表象された雅楽と西洋音楽」、『ブリヂストン美術館・石橋美術館館報』31-33、39号、1983-92。
  - 中田氏によると、藤島武二の《天平の面影》はそのころ造営中であった東宮御所の室内装飾を念頭において制作されたものであり、さらにその時代の画家たちの制作の隠れた動機が深くこの御所建設に関わっている可能性があるという。
  - 24) この件に関して、山本直三郎は常に材料を外国製にすると、日本の建築界に貢献するところが少ないため、片山は国産織物を改善して装飾用織物にするところに注目したと述べている。さらに「東宮御所内部室内装飾物は悉く博士自らの督勵鞭達に依つてなるものを採用して国産を誇としている」(山本直三郎「片山博士の事共」『建築雑誌』372号、1917)とも述べている。片山東熊は明治宮殿の室内装飾にも関与しており、すでに国産織物の室内装飾への応用の可能性を知っていたと考えられる。
  - 25) 『黒田清輝日記 第三巻』中央公論美術出版、1967、p.743、750、756、760。
  - 26) この作品は後に第1回文部省美術展覧会(文展、1907年開催)に出品された。
  - 27) この作品は狩の間の壁面に掛けられて間もない1908年8月頃には、周囲と合わないとの理由から、取り外されたという(『浅井忠画集』京都新聞社、1986、p.343および前川公秀『水仙の影』京都新聞社、1993、p.213)。その後『鷹狩図』という作品名で東京国立博物館に収蔵されている。綴織完成後は、1913年頃壁面に掛けられ、それが焼夷弾の被害を受け現在図様が分からないような状態になっていることを考えると、壁面を飾っていた

ようだ。

28) 小沢朝江『明治の皇室建築』吉川弘文館, 2008。

29) 孔雀と桜をとともに描いた作品としては荒木寛畝《孔雀》1890など。

30) 孔雀を主題とした作品で海外に持ち出された例としては滝和亭《五客》(1873年ウィーン万博出品), 滝和亭《孔雀図》(1893年シカゴ万博出品), 田中利七《孔雀》(1893年シカゴ万博出品), 荒木寛畝《孔雀図》(1900年パリ万博出品)ほか, 菊池芳文下絵《晩春初夏百花百鳥》(オランダ・ハーグ平和宮殿綴錦壁張)など美術染織にも多数存在する。

31) 宮崎法子『花鳥山水画を読み解く』角川書店, 2003。

32) 『臨時費東宮御所建築費 二』明治41年(20214-2) 室内装飾費第336号「納期延期ノ御伺」(明治40年11月)

33) 同, 室内装飾費633号「御書房仕切り口綴帳仕立取付共」寺尾側 明治41年3月17日, 室内装飾費641号「階下伺候ノ間他七室曇帳製作取付代残金」杉田幸五郎代黒川区斎 明治41年3月26日, 室内装飾費第642号「階下各室窓入口並日除仕立及付属品御買上並御入費」寺尾側 明治41年3月23日他

34) 室内装飾費第638号「西参ノ間他六室化粧粧製作取付代」杉田幸五郎代黒川区斎 明治41年3月17日所収「指名申付ノ御伺」, 室内装飾費第1261号「洋館階下各室窓曇帳化粧粧製作取付方御入費」寺尾側 明治41年12月25日他

35) 『東宮御所御造営洋館図面』(3982)所収, 外設71号「階上家具配置平面図」, 外設72号「階下家具配置平面図」

36) 注13に同じ

37) モスレ (Alexander George Mosle, 1862-1949) はドイツの実業家である。1884年から1907まで日本に滞在した。業務の傍ら日本の美術品を収集した。Sebastian Izzard(2004). *Japanese Sword Fittings from the Alexander G. Mosli Collections*

注5にあげた, 中野裕子氏の報告によると, モスレは日本で武器を扱うクルップ社の代理店を行い, 帰国後は在ライプチヒ日本領事館の名譽領事に任命された, とある。

38) エンシェール (Georges Hoentschel, 1855-1915) はフランス有数の室内装飾家である。1900年のパリ, 1904年のセントルイス万国博覧会で室内装飾を行うなどの実績がある。レジオン・ドヌール・オフィシェ (フランスの勲章) を受勲している。

Monelle Hayot(1999). *Georges Hoentschel*  
Daniëlle Kisluk-Grosheide and Ulrich Leben(2013). Georges Hoentschel and his world. *The Magazine ANTIQUES March/April* 39) 注5に同じ

40) 家具費第■■■■号「洋館家具修付職工賃金」杉田幸五郎代黒川区斎 明治41年4月17日 (■は判読不可能な文字を示す)

41) 注5にあげた, 中野裕子氏の報告では, モスレは代理店として, ケルンの宮廷御用達家具業者パーレンベルグに発注し, 納入させた, としている。したがって, この家具配置図はパーレンベルグによるものと考えられる。

42) 家具費第213号「御椅子消毒修繕及搬入」寺尾側

43) 同上

44) 注31に同じ。裂地, 照明器具関係等に同様の伺いがみられた

45) 杉田幸五郎『和洋家具と室内装飾』杉田商店 大正1年

46) 俵元昭編『芝家具の百年史』東京都芝家具商工業協同組合 昭和41年11月20日

47) 児島由美子「岡田信一郎の建築作品における梶田恵設計・制作家具の役割」日本建築学会計画系論文集 (620), 187-192, 社団法人日本建築学会 2007. 10

48) (有)小泉和子生活史研究所編「旧朝香宮邸家具調査報告書」2012

49) 注41に同じ

50) 宮内公文書館所蔵『工事録(工事着手・工事竣工)』, 明治37年~41年(4515)

51) 『臨時費東宮御所建築費』明治38年3-21(20211-3-21)

52) 『臨時費東宮御所建築費』明治38年16(20211-16)

53) 『臨時費東宮御所建築費』明治38年20(20211-20)

54) 『臨時費東宮御所建築費』明治39年4(20212-4)

55) 鈴木博之監修『皇室建築 内匠寮の人と建築』, 建築画報社, 2005年, p. 123-125

56) 同上

57) 完成後のごく短期間, 朝香宮鳩彦夫妻が住居として利用したことが回顧録等からわかるが, 正確な時期や利用状況は明らかではない。

58) 「第三十六献上品天覧」, 『御大礼記録』, 朝日新聞合資会社編, 大正5年

59) 「赤坂離宮にて幻燈天覧」, 『東京朝日新聞』, 大正6年6月1日, 5面

60) 「東宮御別宴」, 『東京朝日新聞』, 大正10年2月16日, 1面, 「赤坂離宮の御宴」, 『東京朝日新聞』, 大正10年9月14日, 5面

61) 「宮内省で頭痛の大建物が二つ」, 『読売新聞』, 大正9年6月22日, 5面

62) 「東宮御成婚後の新殿に赤坂離宮の復活」, 『読売新聞』大正9年7月23日, 5面

63) 宮内公文書館所蔵資料『臨時部営繕費赤坂離宮修飾費 大正11年』1~5(20534-1-5), 外交史料館所蔵資料, 『外国貴賓ノ来朝関係雑件 英国之部 (別冊) 英国皇儲来朝ノ件』1-2(6-4-4, 1-3-2), 『外賓接待録(英国皇太子殿下エドワード, アルバート親王殿下御来航ノ部) 大正11年』1-5(3975-1-5)

64) 工事記録から, 接遇に向けた改修で, 彩鸞の間の窓際に臨時の階段を設けることにより, 車寄せをバルコニーとして使用できるようにしたことが明らかになった。

65) 「少年団を御親閲」, 『東京朝日新聞』, 大正11年4月16日, 5面

66) 英国皇太子接遇時の室内装飾については一部を平賀あまな「英国皇太子接遇時の旧東宮御所(迎賓館赤坂離宮)の利用について」(『家具道具室内史』第4号, 2010年5月, 家具道具室内史学会, pp. 113-114) に発表している。

67) 「繰返し児童に御答礼 御意に召した赤坂離宮」, 『東京朝日新聞』, 大正11年4月13日, 1面

68) さらに, 帝国ホテルに宿泊していた随員5名も4月16日の同ホテルの火災により, 急ぎ赤坂離宮に宿泊することとなった。「英太子随員宿泊中の帝国ホテル本館全焼す」, 『東京朝日新聞』, 大正11年4月17日, 3面

69) 「新装を急ぐ赤坂離宮 英皇太子の御旅館に」, 『東京朝日新聞』, 大正11年2月6日, 3面

70) 寺田春弐「第4節 天井絵画」, 『迎賓館赤坂離宮改修記録』, 迎賓館, 1977年

71) 宮内庁宮内公文書館所蔵『東宮御所御造営誌』, 明治末期, (38718)によると, 造営当初輸入された大食堂の椅子は60脚, 小食堂の椅子は16脚であった

72) 「赤坂離宮を拝観して」, 『東京朝日新聞』, 大正11年4月10日, 3面

73) 同上

74) 『牧野伸顕日記』, 中央公論社, 1990年, pp84-93, 大正12年8月24日から10月にかけて, 赤坂離宮を東宮仮御所として使用する経緯が詳しく書かれている。

75) 宮内公文書館所蔵, 「工事録 12(赤坂離宮の部 1)」, 「工事録 13(赤坂離宮の部 2)」大正13年, (9589-1-2), 「工事録 12(赤坂離宮・東宮仮御所の部)」大正14年(9603)

76) 『牧野伸顕日記』, p. 111

77) 「秩父宮御婚儀御披露の宴」, 『東京朝日新聞』, 昭和3年10月5日, 2面, 「高松宮両殿下御披露の宴」, 『東京朝日新聞』, 昭和5年2月16日, 2面

78) 宮内公文書館所蔵「昭和10年度 満州国皇帝陛下接待費」(61457)

79) 「御旅情慰安に秘法を陳列」, 『東京朝日新聞』, 昭和10年2月22日, 11面, 「離宮の露台に拝す皇帝陛下のお姿」, 『東京朝日新聞』, 昭和10年4月8日, 11面

#### <参考文献>

1) 大橋乗保「浅井忠筆東宮御所壁飾下絵と関係資料について」『京都工芸繊維大学工芸学部研究報告 人文』9号, 京都工芸繊維大学, 1960

2) 小野木重勝『日本の建築 明治大正昭和 2 様式の礎』三省堂, 1979

3) 『景年』芸艸堂, 1979

4) 小野木重勝『明治洋風宮廷建築』相模書房, 1983

5) 『テキスタイル・アート100-近代日本の室内装飾織物』川島織物文化館, 1994

6) 佐々木丞平, 佐々木正子『円山応挙研究』中央公論美術出版, 1996

7) 鈴木博之監修『皇室建築』建築画報社, 2005

8) 『美術染織の精華-織・染・繡による明治の室内装飾』宮内庁三の丸尚蔵館, 2011

9) 小泉和子『西洋家具ものがたり』河出書房新社 2005